



発行者兼編集者  
 鶺鴒 戸 神 宮  
 社 務 所  
 印刷所  
 西 日 本 印 刷

ごあいさつ

宮司 佐師 朝規

明けまして  
 お目出度うございます。



平成九年の新しい年を迎え謹みて御祝  
 詞申し上げます

うがやみきあえずのみこと  
 當神宮は鶺鴒草葺不合尊を始め皇祖皇宗  
 の五神靈を齋き奉り古くから「鶺鴒さん」  
 或いは「鶺鴒さん様」と親しく呼ばれて  
 おり朝野の信仰をあつめて参りました。

先日神代文字の研究の方が御参拝になり社前の怒涛さかまく奇岩に神代文  
 字が記されて居る事をうかがい見る事が出来ました。

古より天下の絶勝の地風光の美と共に古い歴史にも輝いて居ります。  
 亦此の度は念願でありました御本殿の御造営の準備も進められ去年九月各業  
 者の方と契約も終わり、例祭祈年祭の神事を終えて後三月より着工致し十一  
 月に竣工奉告祭を齋行する事となりました。

因みに御社殿は今より三十年前に修復されましたが塩害も甚だしく屋根も  
 破損致し彫刻絵画等のいたみが激しくなる事を恐れ、幸に県の指定文化財で  
 あり御指導を仰ぎ着工する事となりました。

之もひとえに皆様方の御支援の賜と厚く御礼申し上げます。

未筆ながら氏子崇敬者皆様方の御繁栄と御多幸を祈念申し上げ御挨拶と致し  
 ます。



新嘗祭 齋行

十一月二十三日、新嘗祭が宮中をはじめ全国各地の神社で斎行された。

宮中では、天皇陛下が新穀を天神地祇にお供えして、収穫を感謝すると共に、御自ら間食し召される。

当宮でも日中の肌寒さもひと休みといった感じのこの日、午前十一時より宮司以下祭員によって厳粛に斎行され、責任役員、氏子崇敬者総代をは



じめ、官公庁、各地区区長、敬神婦人会、一般崇敬者等多数の参列を賜った。今年収穫された新穀を神々に捧げ、その恵みに感謝するこの祭典には日南、串間市をはじめ、南那珂郡内の各地区から、献穀米、献酒、献菓子等が献上された。又、今年も鵜戸小学校四年生による「こども神楽」が奉納された。

鵜戸・剣法（剣道） 発祥の地 その②

愛洲移香が感得した陰流からは神陰流・疋田陰流・心貫流・柳生流・直心影流等が出た。上泉伊勢守秀綱の創めたのは神陰流である。

塚原卜傳は卜傳流の始祖で、上泉伊勢守の弟子となり夢想剣の極意を伝承して天下に敵がなかったが、報恩のため大太刀を鵜戸神宮に奉納して一は恩師の徳に応へ、一は自分の武術を後世に残したと伝へている。神宮宝物に刃長二尺四寸七分の太刀（吉野朝時代の作品）があったが、これが卜傳の奉納であったのではな

いかと云われていたが、昭和二十一年一月十五日午後三時頃米國進駐軍二名と日本人通訳自称片山と云者現れ又返還すると云い残し、鵜の丸の太刀他刀剣類十一振格納桐箱入りのまま持ち出され、そのままとなっている。

新刀の巨匠井上真改は、初代國貞の次男で宮崎木花村大字木崎の人で、幼にして父を頼って上京し、國傳の門に入り鍛工を学び父の名跡を継いで和泉守と称した。後に真改と名乗ったのは寛文十二年八月からで、この以後のものには銚子之句深く作頗る見事であった。この作品のうちには鵜戸の窟の靈水で鍛えたものもあった。

即ち、

鵜戸山大権現悲觀世音

金山十萬神

稻荷大明神

右之通御守三服大阪

表眞改方え被仰付鵜

戸山御岩屋水を大阪

表之上せ南蠻鐵を以

打立無銘にして禁裏

之差上候様にと御神

女御託有之依之而三

太刀打一太刀は禁裏

八差上一太刀は主君

へ獻じ今一太刀は薩之太刀と名付井上家之寶劍といたし代々所持仕候、以上

という書付も残っていたから、鵜戸岩窟の靈水の功德を知りえるわけである。真改はこの名刀を禁裏へ献上してから、作刀に十六菊の御紋章を刻むことを勅許されたのであるから、鵜戸窟の神水の靈験あらたかなのが察せられる。

先にも述べたが昭和二十一年一月十五日午後三時米國進駐軍に持ち去られた。鵜の丸太刀他の刀剣造込及傳來

○鵜の丸太刀 傳平安朝時代、太刀、銘なし、刀長二尺三寸七分

幅（元七分八厘 先三分八厘）

重（元一分三厘 先三厘）造込鎬造、彫物なし、目釘穴数二つ、拵白鞘

姿殊の外優しく中反深くして巾狭く銚子小く詰り如何にも貴品ある太刀なり、地板目肌より鍊し

- 横尾 昭雄 松井 智幸
益田 豊彰 山下 茂敏
平沼 純 内田 昭子
河口 絹子 谷口 和子
渡辺 房子 松下 三男
竹島板金(有) 松下 清美
藤本 持 大多和佳子
藤田 孝吉 岡本 梓
成松 孝良 岡田多芥進
牧野 利美 中路 正知
和田 撤次 中路 美恵
和田ミサヲ 佐藤 義市
古賀 泰臣 岡田嫁佳子
亀井 盛友 河合 安平
亀井美智子 河野 嗣雄
村尾 秀敏 菊池 俊江
村尾 弘子 木下眞佐子
山本 徳生 菊池 巖
井手口正頼 杉田 昭明
小池 リサ 平吉 慶子
伊藤 芳江 加藤 恵一
平岡 和央 加藤和歌子
鳥塚五十三 川名 孝知
山田 志樹 柏谷 悟
上松 萬映 加藤いく子
舟岡 規夫
儀三武壽実子
山下 憂治
山田 市郎
山本 敏生
辻 義男
平岩 芳央
中谷 茂昌

御本殿改築工事につき 御協賛のお願い

現在の御社殿は、昭和四十三年七月に修改築を終えましたが、

その後歳月を経て塩害・湿気・

日射により塗装の変色、屋根銅

板の腐蝕等障害が生じ外観をも

損じていますので、此度平成九

年十一月の竣工をめざし改築を

計画致しました。

当宮では、より一層の御神威の

発揚をはかりたく、皆様方の御

協賛をお願い申し上げます。

(平成八年九月二十九日、十一月五日)

(敬称略)

- 高橋 隆 猪又 繁夫 千葉 隆俊
宗 敏広 和角 和一 岩西 正大
向江 富男 田辺 利明 吉田 英治
北山 善八 工藤 隆夫 戸田 禮子
中村 正男 竹本 義昭 桑鶴 悟
田口 愛三 北村 勝 殿園 安子
三宅スミコ 馬場 末光 松崎 泰一
加藤 紙 宮崎 彦次 田中 修
青木 和也 白川 安彦 小谷 明博
河野 宗夫 稲田恵理佳 天野 辰三
石田 充 真島 幸治 今南 勝
山一工務店 橋本 清一 柏谷 武男
中島 方輝 天谷 芳次 一ノ瀬好民
古川 重光 堀江 直孝 古矢 明子
笹川 義弘 遠藤 秀雄 松山 久子
廣明 仙多 折田 修 永井 泰子
森田 稔 山本 恵雄 中塚 忠光
山田 勲 浅野吉之助 長沢美代子
高橋 昭子 相原 公夫 柏谷 正巳
大我 政雄 坂東三津二郎 柏谷 邦子
矢野 嘉光 花柳寿南海 藤井 敬志
山浦 寛明 大石 堅三 平岡 なか
伊藤 義巳 村上 勝彦 大橋眞知子
山下 与平 田畑 貴史 近藤 清一
木村 睦美 島中 作五 大山 栄
早田 昭利 扇 正人 中根三代子
中山 圭一 原尻 正春 松島 善一
水野 晴行 酒井 喜由
高田 又三



城田桐久子	合田 祥子	原田 明	吉田金之助
日高 益美	元丸 豊彦	竹村 弘実	葉丸 四雄
清水 隆之	元丸とめこ	柴原 秀満	鶴戸 堅一
清水 悦子	尾関 敬	宮澤 貞夫	石橋 和子
佐藤 四郎	上村 和子	宅見 勝彦	山口剛之介
佐藤ちよう	野村 實男	谷崎 勝則	有園すみえ
橋本 昭夫	秋葉建設(株)	洪田 恵三	人徳 浩
富永 有一	(株)萩原土木	中村 正一	人徳 美幸
富永 葉子	熊川由利子	仁部 実義	薄井 秀雄
(株)大橋屋商店	大久保亮一	上野 和子	安田 栄次
仙葉 栄悦	金丸 俊弘	南谷 和子	富永 優
鈴木 昭夫	池田喜久雄	梅澤 千恵	古川 俊章
左村 義典	奥山忠二郎	渡辺 鈴子	宝徳ハマ子
左村美穂子	中島 実	上村 豊	綿田 法照
古川 慶輔	宮橋 義宣	菊地 裕子	小野 時男
合田 正			

資料収集にご協力を

当神宮は、昭和四十五年の社務所焼失により、貴重な資料もほとんどが灰となってしまいました。それから早三十年近くが経過してしまいましたので、当時の事を御存知の皆様がお元氣なうちに、資料収集をする事となりました。

つきましては、皆様方で神宮の特に昭和四十五

年以前の写真やその他の資料がございましたら、是非御連絡下さいませようお願いします。

尚、対処方法はその都度協議させて頂きます。

連絡先  
日南市大字宮浦三三三二  
鶴戸神宮社務所内  
賽務課  
☎〇九 上二九一〇〇一

社務月報

1月1日	歳旦祭	2月17日	祈年祭	3月5日	千葉県 廣幡八幡宮祓宜岩立國彦氏他41名参拝	
1月3日	元始祭	2月18日	広島東洋カープ 必勝祈願祭	3月13日	大平山三吉神社 宮司 田村泰造氏他3名参拝	
1月8日	日南地区交通安全 全祈願祭	2月19日	警察庁警視 古屋 達男氏他1名参拝	3月14日	長崎県 八幡神社 宮司 進藤一廣氏他45名参拝	
1月23日	九州地区別表神 社宮司会出席の 為宮司熊本県へ 出向	3月16日	責任役員会	3月18日	鶴戸神宮敬神婦 人会研修会	
1月27日	1月31日	3月24日	道中唄全国大会 決勝	3月27日	宮内庁京都事務 所所長 庄司成 男氏他1名参拝	
2月1日	例祭	4月13日	稲荷神社遷座祭 責任役員 鬼束 達朗氏本庁労 賞表彰	4月17日	4月25日	明治神宮崇敬会 相模原支部19 0名参拝
2月4日	第43回創法発祥 鶴戸山頭彰剣道 大会	4月26日	責任役員会	4月22日	2月27日	鶴戸稲荷神社例 祭
2月11日	紀元祭	5月1日	氏子・崇敬者総 代会	5月5日	節供祭奉祝行事 いさみ太鼓奉納	
2月14日	皇學館大學常任 理事 岡田重精 氏他1名参拝					



古屋 達男氏

て麗はしく一面に細き地 鈍輝きて美しく刃直刃若 し、銚子丸く下りて返り 深し棟行中心生

○太刀、吉野朝時代、銘 なし、刃長二尺四寸七分、 反一寸一分、幅(元一分 五分 先七分)重(元二分 五厘 先一分五厘)造込 鑄造、彫物なし、目釘穴 数一つ

腰反深くふんどりあり て鎌倉武士の遺風を窺う に足る剛健なる姿にして 切先やや延心棟行地刃共 二不明、銚子なからん中 心磨り上げ

○脇差、室町末期、銘な し刃長一尺五寸五分、反 三分、幅一寸、重二分、 造込平造彫物なし、目釘 穴数二つ、巾広く先殊に つくらつきて棟丸く如何 にも田舎風なれどさび身 にて他刃共に不明棟丸

○薙刀、鎌倉時代末、銘 なし、刃長二尺二寸八分、 反一寸五分、幅九分三厘、 重二分七厘、造込薙刀造、 彫物表裏腰樋、目釘穴数 一つ、

反至って深く既に疲れ

たれど古く下りて体配にして 先両刃となり、鎌倉末特 有ノ氣風現れ先比較的肉 落ち焼刃かけ出すやに見 ゆれど鑄一面二着きたる 為地刃共に不明

○脇差、江戸中期、銘な し刃長二尺六寸五分、反 三分、幅(元一寸、先七 分)重(元二分 先一分 五厘)造込鑄造、彫物な し、目釘穴数一つ、

江戸時代の打物にして、 見るべき種の物に非ず、 棟行中心生、

○短刀、室町末、銘備州 長舟祐定、刃長七寸五分、 反筒反、幅七分、重二分、 造込平造、彫物なし、目 釘穴数一つ、

鑄深く既に疲れ銚子焼 なし、棟行中心生、

○打刀、明治、銘細川忠 正作、明治二十九年二月、 刃長二尺二寸六分、反四 分五厘、幅(元一寸二厘、 先六分五厘)重(元二分 三厘 先一分二厘)造込 鑄造、彫物なし、目釘穴 数一つ、拵白鞘、

明治三十年二月正四位 勲二等千田貞暁奉納、体

配比較的よく調いてふく ら枯れ地板目肌流れ気味 により立つとも白く刃匂 出来ノ互の自刃鋭り気味 に銚子小丸に下る棟行中 心生、

○脇差、江戸初期、銘藤 原宗則、刃長一尺四寸五 分、反四分、幅(元九分 先六分)重(元二分 先 一分二厘)造込鑄造、彫 持なし、目釘穴数一つ、 拵白鞘、傳來明治二十七 年二月十五日、大阪市北 区堂島浜通り三丁目二三 番邸大谷六左衛門奉納、

鑄巾狭まくフクラ着き て地小板目比較的より鍊 れ刃互の目刃鋭く心にて 荒銚着き砂流れがある銚 子掃きかけ心。棟行中心 生、

○打刀、江戸初期、銘和 泉守藤原國貞、刃長二尺 三寸三分、反七分五厘、 幅(元九分五厘 先七分) 重(元二分二厘、先一分 五厘)造込鑄造、彫物な し、目釘穴数一つ、拵白 鞘、

姿調へど平肉至ってと ぼしく中心迄肉落ち如何

に粗製に見え地小板目 刃小鈍出来の直刃なれど 弱く銘振りも弱し棟行中 心生、

○脇差、室町末期、銘な し刃長一尺二寸七分、反 四分幅(元一寸、重二分、 造込莖蒲造、彫物なし、 目釘穴数一つ、

比較的健全に見ゆれど 鑄身にて他刃共に不明、 棟行中心磨り上げ鈍面白 し、

○打刀、江戸初期、銘 「大和」と二字残る。刃長 二尺二寸四分、反六分、 幅(元一寸 先七分)重

(元二分 先一分五厘)造 込鑄造、彫物なし、目釘 穴数三つ、拵なし、反頃 合にして切先延心地小板 目つまりて黒く棟寄り枉 刃直刃仕立の互の目刃足 浅く入り匂口健かにして 銚子丸し棟行忠磨り上げ、 銘不分明なれど大和太椽 藤原正則ならん。

以上十一振が持ち出さ れた刀の特徴を記して居 くと、鶴戸の岩窟は剣法 (剣道)の発祥の地であり、 又武士の魂たる刀剣にも 靈驗あらたかである。

銅板奉納者芳名

(平成八年五月五日〜九月二十四日) (敬称略)

今年三月より、御本殿改築工事が着工致しますので、銅板奉納の御協賛をお願いを平成八年九月二十九日より、御本殿改築工事の御協賛案内へと変更させて頂きました。

御協賛を頂きました皆様方には、御本殿竣工奉告祭終了の後、改めて御礼申し上げます。

片山 武俊 弓削 正文 中村 三三子  
永留 博文 大寺留美子 笹平 克巳







平成9年 厄祓一覧表 (但、数え年)

女 性			男 性		
	昭和42年 31才		厄入		昭和33年 40才
昭和37年 36才	昭和41年 32才	昭和55年 18才	前入	昭和13年 60才	昭和32年 41才
昭和36年 37才	昭和40年 33才	昭和54年 19才	本厄	昭和12年 61才	昭和31年 42才
昭和35年 38才	昭和39年 34才	昭和53年 20才	後厄	昭和11年 62才	昭和30年 43才
	昭和38年 35才		厄明		昭和29年 44才

厄入・厄祓・厄明の御案内

厄年は人生の転機にあたり、心身共に苦勞の多い年令と  
 言われています。  
 年の始めに御参拝を賜り御祈祷を受けられまして、本年  
 も無病息災にお過し下さいますよう御案内申し上げます。

七五三詣

「朝夕の涼しさ」から、  
 「朝夕の冷え込み」を感じ  
 られるようになった十一  
 月に入ると、両親に手を  
 ひかれ七五三詣りをする  
 子供達の明るい声が境内  
 に響きわたり、あちらこ  
 ちらで記念写真を撮る微  
 笑ましい光景が目につく  
 た。



の成長を神様にお願いす  
 るお参りである。  
 現在のよう十一月十  
 五日になったのは、徳川  
 五代將軍綱吉の子徳松の  
 祝からとも、又この日が  
 陰陽道に唱える二十八宿  
 の鬼宿にあたり、何事の  
 祝にも最良の日であった  
 とされた事によるともい  
 われている。

氏子総代  
委嘱式

氏子総代松田明氏死去  
 に伴い、十月一日御本殿  
 にて委嘱式が行われ、松  
 浦秀夫氏に委嘱状が渡さ  
 れた。

辞令

鵜戸神宮権宮司

日高 輝和

願により本職を免ずる  
 神社本庁(九月十八日)

編集後記

正月の準備で門松、注  
 連飾り、鏡餅等がありま  
 す。  
 門松は、歳神様を迎え  
 る神籬(神様の宿る所)  
 です。

注連飾りは、清らかな  
 場所を示すものです。

鏡餅は、歳神様へのお  
 供えです。所で、鏡餅の  
 上に橙を置き、ゆずり葉  
 を飾り、裏白を下に敷き  
 ますが、何故これらを使  
 用するのでしょうか。

橙は、果実が落果しに  
 くく、新旧代々の実が同  
 一樹になることからこの  
 名があり、一族が繁栄す  
 ることにたたえられます。

ゆずり葉は、新しい葉が  
 成長して古い葉が落ちると  
 ころからこの名で呼ばれ、  
 子孫が絶えることなく、  
 代々継承されていくこと  
 にたとえられ「親子草」とも  
 言われています。

裏白は、シダとも言い、  
 「歯垂る」にかけて長寿の  
 意味をもたせています。

いずれも命の栄えを言  
 寿ぐとともに、子孫が  
 益々発展するようにとの  
 祈りがこめられています。

(中武)